

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第5回 神山魚貫

神山魚貫という人

神山魚貫は、天明8(1788)年、埴生郡飯岡村(現在の飯岡)に父三郎左衛門、母市の長男として生まれた。幼少の頃は周助といったが、のちに三郎左衛門を襲名し、魚貫・松廼舎・無境庵を号とした。魚貫の号はさまざまな説があるが、一説には『古今和歌集』の撰者紀貫之と、佐原の国学者・歌人伊能魚彦の両者の名前を一字ずつ取ったものといわれている。

父は、農夫としてはあまり頑健な体の持ち主ではなかったもので、魚貫は14歳の頃から農耕に従事するようになった。魚貫は父を手伝いながらも、15歳の頃から人に頼んで書物を買って求め、独学で勉強を始めていた。そうした中で魚貫の心を捉えたのは、穏やかでやわらかな調子の百人一首の和歌の数々であった。いつまでも耳に残って忘れられない和歌の魅力に引き付けられた魚貫は、自分も和歌を詠んでみようと思ったのであった。しかし和歌に親しんだものの、昼の農作業の疲れで勉強ははかどらなかった。

このように農耕と独学の日々に追われていた魚貫であったが、金江津村(現在の茨城県河内町)に和算(数学)家の飯島武雄がいることを知り、この門を叩いた。専門が和算であったが、魚貫は飯島武雄から、文法や言葉の活用を学ぶことができた。その後、一人で古書を読み続け、独自の作風を築き上げていった。



上／神山魚貫の歌集『苔清水』(市立図書館所蔵)
下／神山魚貫の石碑(場所：飯岡)

天明8年～明治15年(1788～1882)

埴生郡飯岡村(現在の飯岡)に生まれる。田園歌人。父の名である三郎左衛門を襲名し、村の名主も務めた。幼少より和歌を好み、独学で歌を学び生涯を通して歌作と書に親しんだ。門人は、近在はもとより現在の千葉県・茨城県に限らず新潟県などにも及んでいた。



古今調の歌風を確立

文化4(1807)年、20歳で飯岡村の名主となり村政に関わったが、その体験が歌風と結び付くことはなく、専ら花鳥風月を歌う古今調の歌風を確立していった。

文政3(1820)年、33歳になった魚貫は江戸で有名な国学者小山田与清の訪問を受ける。魚貫にとっては、与清が中央の学者と接した最初で最後の人であり、この後も与清との交流は続いた。

文政10年、40歳になった魚貫は、家業を子どもに譲り、以後はいちずに詠歌にいそしみ、門人の指導に心を注いだ。魚貫自筆の『門生名簿写』によると、魚貫の門人は、国学者の椿仲輔、伊能穎則、鈴木雅之らをはじめ、天保5(1834)年から明治10(1877)年まで175人に及んでいる。

魚貫が詠んだ和歌は約2万首といわれ、主な著作には『詞の道芝』『松廼舎文集』などがある。中でも安政元(1854)年に刊行された『苔清水』は、代表作を収めたものとしてよく知られている。印刷に使用された56点の版木は、市指定文化財として成田山靈光館に保管されている。

生涯、自分の心を自然の中に映して生き続けた魚貫は、明治15年2月3日、95歳の長寿を全うし、この世を去った。

参考資料：『成田市史』中世・近世編

編集後記

10月は多くのイベントが雨や台風のため内容変更や中止となりました。毎月掲載している「まちのできごと」も10月は室内や雨の中の写真が多くなってしまいました。今号の表紙のサツマイモ掘りも、前日の天気予報では雨でしたが、何とか天気が持ちこたえて、担当者も一安心。多くの参加者でにぎわっていました。秋の味覚のサツマイモ。わが家でも焼き芋や天ぷらでおいしくいただきました。

平成29年11月15日号 No.1351

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。